

彦根城博物館だより

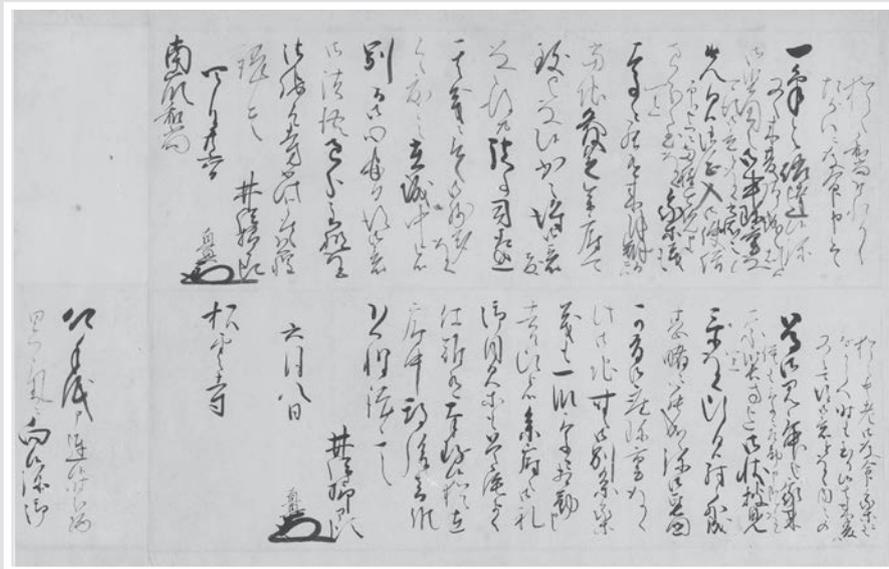
Hikone Castle Museum News 2024.9.1

146

資料紹介

南嶺慧詢宛 井伊直興書状

当館蔵



臨濟宗松雲寺（現滋賀県東近江市）の住持南嶺慧詢へ宛てた井伊家四代直興の直筆書状。南嶺は直興が深く帰依した人物です。書状は、直興が藩主を勤めた元禄期（一六八八～一七〇四）と隠居後の宝永期（一七〇四～一七二一）のものを主とし、全九十三通が卷子二巻に仕立てられています。もとは松雲寺の什物として保管され、遅くとも十代直幸以来、井伊家の代替わり毎に藩主の御覧に入れられることで、同寺との所縁を井伊家に再認識してもらった役割を果たしました。十二代直亮の頃から井伊家で保管されるようになり、現在彦根藩井伊家文書として当館に伝来しています。

* 本作品は企画展「井伊直興と永源寺南嶺慧詢」で展示します。

展示案内

●● 常設展示 ●●
ほんもの“との出会い”

— 彦根藩井伊家伝来の大名道具を中心に八〇点あまりを展示 —

2024年
9月～12月

企画展
8/31^土～9/29^日
展示室1

井伊直興と 永源寺南嶺慧詢

彦根藩井伊家四代直興（二六五六～一七七）は、彦根藩政の基礎となる政策をいくつも実施し、幕府の大老職も勤めた人物です。歴代の井伊家当主の中でも仏教を篤く信仰した直興は、永源寺や同寺の末寺 松雲寺（現東近江市）の住持を勤めた南嶺慧詢（二六二九～一七二四）に深く帰依し、様々な法要を依頼するなど、親密な関係を結びました。本展では、二人の人物像や交流関係、直興の仏教信仰の具体的な様子を紹介します。

*関連講演会を開催します。詳細は4頁をご覧ください。



井伊直興画像
(部分、永源寺蔵)



南嶺慧詢頂相
(部分、松雲寺蔵)

テーマ展
10/2^水～11/4^休
展示室1

金のきらめき — 輝きの日本美術 —

洋の東西そして時代を問わず、金は、その希少性と美しさから人々を惹きつけてきました。日本においても、古来、聖性の象徴とされ、神や仏などを表す際、その荘厳に多用されてきました。さらには、屏風をはじめとする絵画にも取り入れられて、寺社や御殿などの空間を華や

かに彩っています。また、金は溶かす、伸ばすなどの加工が容易であることから、金工、時絵、陶磁器、染織などの工芸品の素材としても、じつに多様な展開を遂げました。本展では、当館収蔵品を通して、金の輝きの役割や多彩な表現を紹介します。

◎ギャラリートーク◎

■日時 10月5日(土) 14時～(30分程度)
■講師 茨木恵美(当館学芸員)

*関連講座を開催します。詳細は4頁をご覧ください。

金梨地牡丹唐草
能道具時絵鞍・鎧



阿彌陀三尊来迎図の内
阿彌陀如来(高宮寺蔵)



浄土変相図(部分、唯稱寺蔵)



能装束 金地団扇形と桐と
七宝散らし文様唐織



テーマ展
11/23^祝～12/24^火
展示室1

大名家族の日常

— 儀礼から遊興まで —

江戸時代、彦根の表御殿や下屋敷、江戸の屋敷に居住した彦根藩主とその家族たち。表御殿で行われた様々な儀礼に参加する傍ら、武芸の稽古を始めとして、茶の湯や和歌などの文芸にも取り組んだほか、寺社参詣などの外出を行い、公私にわたって多彩な生活を営んでいました。本展では、井伊家十代直幸の時代を中心に、側近くに仕えた家臣の日記や奥女中が残した書状、生活を彩った調度品などから大名家族の日常に迫ります。

◎ギャラリートーク◎

■日時 11月23日(土・祝) 14時～(30分程度)
■講師 柴崎謙信(当館学芸員)



黒漆塗貝時絵煙草盆



表御殿図

金亀玉鶴



「側役日記」にみる十代直幸期の演能

― 口待の囃子を通して ―

江戸時代、幕府は能を式楽（儀式で行う楽舞）とし、能役者を召し抱えて、將軍宣下を筆頭とする儀礼やさまざまな行事で能を催しました。諸藩もこれに倣って盛んに能を行い、彦根藩井伊家も、特に十代直幸（一七三二～一七八九）以降、頻繁に能を実施したことが分かっています。

直幸は、世子時代に喜多流宗家八世親能に入門するなど、若くから能を愛好しました。藩主となってからも、正月の行事として彦根城表御殿での松囃子を定例化したほか、しばしば能を催し、自らも演じるなど、井伊家の能が隆盛する契機

を作りました。

「側役日記」（彦根藩井伊家文書）は、井伊家においてどのような能が行われていたのかを具体的に知ることでできる史料の一つです。藩主の側近くに仕えて職務の補佐を担った側役が記した業務記録で、この中に、藩主の入部や年賀などを祝う能のほか、謡初、松囃子など、さまざまな演能を確認することができます。当日の晩が口待であることをうけて催された囃子（口待の囃子」と仮称）も、その一例です。

口待とは、福神としても信仰された弁財天の縁日である、巳の日に行われる行事です。前日の辰の日の夜から人々が集い、飲食するなどして巳の日を待ち、五穀豊穡などを祈念しました。また、囃子とは、シテ（主役）、地謡、囃子（楽器）のみで、面・装束は付けずに、紋服で演じる形式の能です。

管見の限り口待に囃子を催す事例を他に確認し得ないものの、「側役日記」には、①明和五年（一七六八）八月十三日、②十月十四日、③同六年二月十五日、④安永八年（一七七九）二月三日と四回が記録されています。いずれも直幸が彦根在国中のもので、表御殿で行われ、直幸のごく身近に仕えた、用人役、側役、小姓などが拝見者として参列しました。この囃子が弁財天への祈願を意図したものであったかは不明ですが、囃子翌日の巳の日に、

城下の大洞弁財天へ参詣あるいは代拝がなされていることから、少なくとも同社を意識して催された能であったと推測されます。

四回の囃子の内、詳細が確認できるのは③と④です。③は、暮時から表御座之間で、「月宮殿」「田村」「船弁慶」「三輪」「狸々」の五曲が行われ、直幸は「月宮殿」で鼓、「三輪」でシテを演じました。この時の演者は、藩士の本田七左衛門、川喜多勝兵衛、今村平次、今村蘭雅、荒川孟彦、宇田教岸、高山新六、山上良蔵、松井三郎、片岡一郎兵衛の十人で、このほかに、地謡として金具屋八郎兵衛なる人物が参加しています。

今村蘭雅は、側役や用人役をつとめた直幸の側近で、享保十六年（一七三二）頃に喜多流宗家入門し、謡の伝授も受けた実力の持ち主です。明和三年（一七六八）から七年頃にかけて、蘭雅をはじめとする謡を愛好する藩士達は、独自に喜多流謡本の再編集に取り組んでおり、③の演者でもある、蘭雅の息子・今村平次、川喜多勝兵衛、本田七左衛門がこの作業に関わっていました（岡本節斎著「太郎次郎」鴻山文庫、法政大学能楽研究所）。また、荒川孟彦、片岡一郎兵衛は、庶子の謡指南役をつとめた藩士です。

蘭雅、七左衛門、孟彦は、①②にも出演したとみられることに加え、③の出演者の名前は明和年間他の演能にも確認

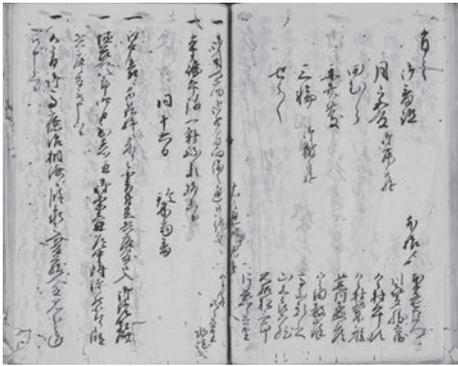
されます。これらからみて、③に出演した藩士達が、当時の井伊家の能の中心的な担い手であったと考えられます。

なお、城下の富裕な町人かと思われる金具屋八郎兵衛は、この囃子の約三十年前の享保年間に、彦根藩士に謡を教授していたことが分かっています（太郎次郎）。八郎兵衛の存在は、城下における謡の広がりやうかがわせる点でも注目されるものです。

さて一方、③の十年後、安永八年に催された④をみると、能八曲、狂言七曲と演目数が増加し、出演者の多くが増田縫殿介、藤田勝次、小野田栄三郎、杉原十介などの小姓となっており、演者が藩士から主に小姓へと変化していることが分かります。③④どちらにも出演しているのは、荒川孟彦のみです。③の出演者である今村平次の名は、同年の謡初や松囃子などに確認できるものの、その中心であった今村蘭雅は安永六年（一七七七）、本田七左衛門は同五年に没し、川喜多勝兵衛も翌年に隠居を迎える年齢となりました。つまり、③から④の十年の間に、井伊家の能の担い手に世代交代があったといえるのではないのでしょうか。

このように「側役日記」は、井伊家の演能の詳細やその変遷を明らかにし得る重要な史料です。その内容を読み解き検討することが今後の課題です。

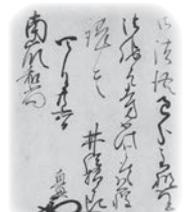
（茨木恵実）



側役日記（明和六年二月十五日条）

カレンダー&インフォメーション

| | | | | |
|------------------------|-------------|----------------------------------|---|---|
| 9月 | 8/31~9/29 | 7(土) 14:00~ | 教室 古文書のみかた 中級編② | *「古文書のみかた」の申し込みは終了しています。 |
| | | 14(土) 14:00~ | 講演会 企画展関連講演会「南嶺慧詢宛て井伊直興書状を読み解く」講師:北野 智也(当館学芸員) | 臨濟宗の名刹・永源寺で住持を勤めた南嶺慧詢。井伊家4代直興が南嶺に宛てた書状を読み解き、二人の実像に迫ります。 ■日時 9月14日(土) 14:00~15:30 *受付 13:30~ ■資料代 100円 ■会場 当館講堂 ■定員 50名(当日受付・先着順) |
| | | 21(土) 14:00~ | 教室 古文書のみかた 中級編③ | |
| 9月30日(月)~10月1日(火) 一部休室 | | | | |
| 10月 | 10/2~11/4 | 5(土) 14:00~ | テーマ展 ギャラリートーク 講師:茨木 恵美(当館学芸員) | |
| | | 6(日) 14:00~ | 教室 古文書のみかた 中級編④ | |
| | | 12(土) 14:00~ | 講座 テーマ展関連講座「金の輝きと聖性」講師:茨木 恵美(当館学芸員) | 荘厳に光り輝く金。聖性の表現としてどのように金が用いられてきたか、仏教美術を中心に紹介します。 ■日時 10月12日(土) 14:00~15:30 *受付 13:30~ ■資料代 100円 ■会場 当館講堂 ■定員 50名(当日受付・先着順) |
| | | 19(土) 14:00~ | 教室 古文書のみかた 中級編⑤ | |
| | | 27(日) 10:00~13:30~ | 教室 わくわく体験スクール「茶道を楽しもう」講師:外海 和子氏(表千家茶道講師) | 殿様の住まいを復元した木造棟でお茶の体験を行います。 ■日時 10月27日(日) ①1~3年生 13:30~15:30 ②4~6年生 10:00~12:00 ■場所 当館講堂、木造棟 ■参加費 500円(保険料等) ■定員 各部20名(応募者多数の場合は抽選) ■対象 彦根市に在住もしくは在学する小学生 ■申込方法 9月1日~20日の期間中に彦根市電子申請サービスで申込 *申込は1人1回まで |
| 11月 | | 2(土) 14:00~ | 教室 古文書のみかた 中級編⑥ | |
| | | 3(日・祝) 14:00~ | 講座 シリーズ 古文書から読み解く彦根の歴史③「彦根城と城下町」講師:荒田 雄市(当館学芸員) | 築城や石垣修復等の維持管理、城下町の成り立ちについて紹介します。 ■日時 11月3日(日・祝) 14:00~15:30 *受付 13:30~ ■資料代 100円 ■会場 当館講堂 ■定員 50名(当日受付・先着順) |
| | 11/23~12/24 | 11月5日(火)~11月22日(金) リニューアル工事休館 | | |
| 12月 | | 23(土・祝) 14:00~ | テーマ展 ギャラリートーク 講師:柴崎 謙信(当館学芸員) | |
| | | 12月25日(水)~12月31日(火)年末休館 | | |



井伊直興書状(部分)



善光寺式阿彌陀三尊像(部分、高宮寺蔵)



御城内御絵図

観覧料を改定します

施設や収蔵品の維持管理・保存等に必要となる財源の確保を図るため、令和6年10月1日から観覧料を改定いたします。

■観覧料(10月1日~)■
彦根城博物館:一般700円(団体560円)、
小中学生350円(団体280円)
彦根城博物館・彦根城・玄宮園セット券:
一般1,500円(団体1,200円)、小中学生550円(団体440円)

リニューアル工事のため休館します

ミュージアムショップのリニューアル工事を行うため、臨時休館いたします。新ショップは、令和7年3月20日(木・祝)にオープンいたします。どうぞご期待ください!

■休館期間■
令和6年(2024年)11月5日(火)~11月22日(金)
令和7年(2025年)2月3日(月)~2月21日(金)

